

管内飼養山羊に発生した肝蛭症事例

南丹家畜保健衛生所

○森永大吉 大隅恒佑¹⁾

【はじめに】反芻動物の肝蛭症は、主に胆管への肝蛭寄生により引き起こされ、肝傷害や発育遅延、泌乳量の低下等により経済的損失を与える疾病である。国内飼養牛での発生が減少している中、管内飼養山羊において発生したので概要を報告する。【発生農場】山間部に位置し、発生当時、山羊 3 頭、烏骨鶏 5 羽、馬 1 頭を飼養。山羊は、以前水田であった土地で放牧されていた。【発生概要】令和 5 年 11 月 6 日、山羊 1 頭が死亡。その後、13 日、17 日にそれぞれ 1 頭死亡。短期間での死亡が続いたため、2 頭目、3 頭目の病理解剖を実施したところ、2 頭ともに可視粘膜蒼白、腹水多量貯留、肝臓硬結、胆管内に肝蛭成虫の多数寄生、直腸便に肝蛭卵を多数確認した。3 頭目の病理組織学的検査では、胆管上皮の出血及び結合組織の増生、肝臓実質には帯状の肝細胞壊死を認めた。以上のことから、3 頭の死亡原因は肝蛭症によるものと診断した。【対応】当該農場では、令和 6 年 1 月に他県から山羊 3 頭を新たに導入し、春から先と同じ放牧場に放牧を開始した。放牧に当たり駆虫薬の投与を指導するとともに当所による定期的な糞便検査による監視を実施中。また、管内で山羊を放牧飼養する農場のうち 2 農場の山羊糞便を検査し肝蛭卵陰性を確認。シカ等の野生動物を介し肝蛭の汚染地域拡大が懸念されるため、山羊飼養者に対し、注意喚起するとともに糞便検査、投薬指導等により発生予防に努めていきたい。

1) 現：丹後保健所